

会長就任にあたって

もり た ぜん いち ろう
森 田 善 一 郎



(略 歴)

昭和 28 年 3 月 大阪大学工学部冶金学科卒業
昭和 34 年 2 月 大阪大学大学院工学研究科冶金学専攻博士課程修了, 工学博士
昭和 35 年 4 月 関西大学助教授 (工学部)
昭和 41 年 10 月 大阪大学助教授 (工学部)
昭和 48 年 10 月 大阪大学教授 (工学部)

(研究業績)

鉄鋼製錬反応ならびに鋼の凝固現象に関する熱力学的研究. 溶鉄を中心とした冶金融体の物性と構造に関する研究. 冶金融体の粘度迅速測定用粘度計の開発.

(受 賞)

本会西山記念賞, 俵論文賞 日本金属学会功績賞, 谷川-ハリス賞

このたび、私は第 75 回通常総会の場におきまして、はからずも新しく本会会長の大役を仰せつかることになりました。身に余る光栄と存じますと同時に、その責務の重大さに身のひきしめる思いをいたしております。これまで、学会あるいは産業界において赫赫たる業績を挙げてこられた高名な大学および企業の先輩の方々が多数おられる中で、あえて私ごとき若輩が本会会長に選ばれましたことは、創立 75 周年の節目を迎えた本協会の今後を展望するとき人事の若返りが必要であるとの八木前会長をはじめとする本会役員の皆様のお考えによるものと伺っております。私はもとより浅学菲才、若輩にして非力ではありますが、この大役をお引き受けいたしましたからには、本協会の更なる発展のため、ひいては我が国鉄鋼産業界の活性化のため、会員の皆様とともに尽力したいと願っていたしだいでありたい。

さて 1986 年に 1 億 t を割り込んだ我が国粗鋼生産量も、その後内需の活況に支えられて再び 1 億 t の水準を上まわり、この 1~2 年鉄鋼業界は活況を呈しました。まことにご同慶に堪えないしだいでありたい。しかし今年になって急激に進んだ円安などの経済的・政治的環境の変化の中で、この活況がいつまで続くかという点では今も見通しが不鮮明であることに変わりはありません。このような背景の中で、我が国鉄鋼産業の活性をいかにして持続させるかが現在の我が国鉄鋼界に課せられた最大の課題であると申せましょう。そのため鉄鋼各社も鉄鋼部門の合理化、多角化による業容の拡大などに血のにじむような努力をされていることを私もよく承知いたしております。一方このような努力とともに、新技術を生み出すための基礎ならびに応用研究が今後ますます重要となるであろうことは今さら申し上げるまでもありませんが、これらのすべては「優れた人材」無くしては決して成就し得ないであろうということを私はここで強調したいのであります。要するにいつの時代においても、政治、経済、学術、文化などを支えてきたのは優秀な人材なのであります¹⁾。この意味で、とくに鉄鋼ならびにその周辺の科学と技術に関する教育と研究を通して専門技術者ならびに研究者を育成すべき大学の責務はきわめて重大であります。その現状はまことに憂うべきものであり、このことは一般に正しく認識されていないよ

うであります。大学における教育と研究を支えるべき文部省文教予算も、昭和 57 年度から始まった概算要求のゼロ・シーリング、さらに 58 年度からのマイナス・シーリングのもとでその総額には枠がはめられたままであり、国立大学に例をとってみますと、その予算に直接かかわる国立学校特別会計における文教施設費にいたっては、昭和 59 年度に 1546 億円であったものが、平成元年度には 820 億円と半減しております²⁾。大学における基礎研究を支える文部省科学研究費の中でも、特別推進研究や重点領域研究などの大型研究費はもっぱら先端科学・技術や話題性のあるものに対してであり、「鉄鋼」のような重要でありながら地味な分野における研究は常にその対象外にあります。

一方、大学における鉄鋼の分野における研究・教育体系につきましても、最近の「冶金学」あるいは「金属工学」から「材料工学」への流れの中で大きく変わりつつあり³⁾、最近脚光を浴びている新素材や先端材料に比して、その重要性の認識は明らかに相対的に低下してきていることは否めません。とくに製銑、鉄鋼の分野においてその傾向が大きく、学生側からの不人気ともあいまって、今後の鉄鋼界における優秀な人材確保の立場からみれば、解決を急がねばならない多くの問題を抱えております。

さて歴史的な立場からみれば、人類の文明の進展と鉄鋼消費量との間にはきわめて明確な相関があり、将来の文明社会を展望すれば、鉄鋼に替わるべき安価にして多様な特性を有する新素材が出現しない限り、鉄鋼の需要は地球規模においてまだまだ持続する筈であります。昨年度の世界の粗鋼総生産量が予想を 10 パーセントも上まわる 7 億 7 千 t であった事実をもってしてもこのことは明らかであります。一方、鉄鋼の材質面におきましても、超高級化を志向して、不純物、介在物、偏析の極低減化などの技術面にもまだ無限の可能性を残しており、また鉄鋼をして新素材たらしめる機能性の発見の夢もあり、これらの意味におきまして、今後 21 世紀までに残されたあと 10 年間ならびにそれに引き続く 21 世紀も、実質的には「鉄の時代」であると私は固く信じております。とはいえ、資源、エネルギーに乏しい我が国の鉄鋼業が、揺れ動く世界経済の中で、この可能性を求めて生産現状を維持していくことは並たいていのことではありません。この難関を克服するためには、我が国鉄鋼界が世界各国と良好なる国際関係を保ちつつ、先に述べました大学における鉄鋼の基礎研究の推進と優れた人材の育成と確保に尽力することが不可欠であり、そのための学界、産業界の相互理解と協力の進展のいかんが、我が国鉄鋼産業の未来を占う鍵となるであります。

以上、会長就任に際しましての私の所見の一端を述べさせていただきました。

日本鉄鋼協会は、歴代会長ならびに役員、事務局のご尽力のもとに、春秋の学術講演大会、和・欧文会誌の充実、共同研究会、基礎共同研究会の活動、記念講座、国際会議の開催、国際交流、情報活動、標準化事業、ISO 事業などきわめて広範な事業分野で多くの成果を挙げて参りました。ここに八木前会長をはじめ歴代会長、役員、事務局の方々のご労苦に感謝申しあげますとともに、75 年の歴史と伝統に輝く日本鉄鋼協会の更なる発展のため、会員の皆様ともども努力いたす所存であります。ここに会員の皆様のご支援とご鞭撻をお願い申しあげます。

1) 森田善一郎：電気製鋼，60 (1989) 2, p. 165

2) 熊谷 信明：生産と技術，42 (1990) 1, p. 1

3) 森田善一郎：日本金属学会会報，28 (1989), p. 556